

ラウンドテーブル「地域大国の政治をどう比較するか？」

(毛里) 皆さん、大変お待たせいたしました。本日第2セッションのラウンドテーブルをこれから始めたいと思います。ご承知のように時間が限定されています。それからテーマが非常にたくさんあります。扱われるべき時代も長いですし、ユーラシア全域をつかまなければいけないとすれば、おそらく気が遠くなるようなラウンドテーブルになるでしょう。しかし時間は120分と決まっています。どんなに遅くても18時には終えたいと思います。

私は早稲田大学の毛里と申します。最近は学会で、全体に問題を提起する仕掛け人か、あるいは最後に総括する始末屋の役割をもっぱら引き受けています。本日は大変面白いテーマで、私自身は中国、ソ連、ロシア、そしてインドを比較したいという非常に強い希望を持っていますので、自分で楽しみながら今日の五人の方、そして今日の午前中にご報告下さったお三方を加えて、効率の高い二時間の議論をしたいと思っております。

ご紹介いたしますが、最初は田畑さんです。北海道大学スラブ研究センターのロシア経済の専門家でいらっしゃいます。田畑さんには第一番に発言していただきます。それから二番目が、JETRO アジア経済研究所の、ここでは一番若い精鋭の近藤則夫さんでいらっしゃいます。今日はパワーポイントを用意して五分間の報告に備えていらっしゃいます。それから三番目が天児慧さん、早稲田大学アジア太平洋研究科の中国についての論客です。それから、次にやはり中国研究でご活躍中の、東京大学法学部の高原さんです。両者ともどちらかという中国政治ですね。今日は中国の論客が五分の二いますから、お二人にはできるだけ静かにしていただいた方が公平でいいかもしれません。それから最後が、スラブ研究センターの風雲児でしょうか、松里さんです。明日は宗教と政治について報告なさいますが、今日はそれとは別に、何かとても楽しいお話を用意していると昨日メールで伺っています。

こういう多種多彩の五人の方を、いかに発言させないかというのは大変難しい仕事であります。また対象はあまりに広く長く、そして問題は拡散しています。少しでも議論を集中させたいと考えまして、私の方で報告集に書いていますように、質問を用意しました(巻末の「司会者のメモ」参照)。これは、いわば権威主義的に、このパネルの枠組みをこちらで決めるというつもりで出しました。せっかく作ったので、これに沿って簡単にまず私の方からお話いたします。1は省略します。2からスタートしますが、基本的には本ラウンドの目的は、三つのユーラシア地域大国の政治比較と限定されています。それで、一つの問題は、なぜ地域大国なのかということです。なぜ地域大国を比較しなければいけないのか。地域大国を比較するとどんないいことがあるのかということですね。これが私には

あまりはっきりしません。これはスラブ研究センター自身の問題設定とたぶん絡んでいると思いますので、この地域大国の問題をどういうふうに考えるかということをもっと伺ってみたいと思います。

それから第3のところを書いてありますが、比較とは何ぞやということです。比較というのは大変面白いし、大変に役に立つし、仕事をしたような気持ちになります。でも、考えてみると、比較のファンクションというのでしょうか、あるいは効能というのはいろいろあって、何を指すかということではないのですね。つまりここに書いてあるのは、比較というのはいわゆるその抽象化をするための一つのプロセスとして比較するというやり方があります。比較政治学なんていうのはまさにそうで、そのたくさんのデータ、中立的データをたくさん集めて、比較しながら一つの何か法則性、アジアにおける民主化の法則などというものを引っ張り出すというやり方があります。

それから多くの場合、それではないやり方、例えばロシアと中国を比較した場合に、中国はどうしてこんなふうになるのか、というやり方ですね。今日私は時間がなくて中兼さんのご報告を伺えなかったのですが、ペーパーを拝見する限り、中兼さんはそういうスタンスでなさっています。つまり中国の移行の特徴を導き出すために、ソ連、ロシアとの比較、あるいはインドとの比較というものを頭の中に描いていらっしゃる。ですからどういう比較をして、どういう効果を得たいと考えるかということをもっと明示的においた方がいいと思うのです。めったやたらに比較してもほとんど意味なしと私は思いますので、それが4で言っているところです。

そして5について。明日、この会場で行われる各セッションでは、ロシア、中国、インドという地域大国を比較する場合に、農村共同体あるいはエリートがどういう政治的機能を果たすか、あるいは構造の中でどういう役割を果たすかということに、非常に強い関心が注がれています。また、市民社会は、市場化とどういう形で関わりながら形成されるのか、あるいはその市民社会が、市場化に関与しない場合とどう違うのか。それから、ロシア、中国、インドともども、非常に多数の民族問題を抱えた複合的な統合国家であり、かつてエンパイアであったという歴史を持ちます。これはまさに塩川さんの大きなお仕事がありますが、そういう複合的な統合の中で、ロシア、中国、インドの大きな違いがやはりあると思います。どう違うのか、なぜ違うのかという問題です。

ですから、こういう形で議論の土俵を作っていくと、中国、ロシアそれからインドという、大きな訳の分からないものを、一つの土俵に上げて比較することが容易になってくると思いますので、できればそういうことで、今日も五人の方に発言していただければ大変ありがたいと思います。一応五人の方には問題を設定しておきました。ただし、例えば松里さんはこの質問を全く無視しますと最初におっしゃっているので、まあ、それでもいいですよということを申し上げてあります。でもこれに従う方もいらっしゃるでしょう。

それでまず第一問、地域大国を取り上げる場合に、地域大国であるということの意義です。つまり、地域大国は共通の外交行動をとるのか、あるいは同じ国内構造を持つのかどうかということです。これを前提とするならば、地域大国で比較する意味がありますが、前提としていなければ、地域大国という共通項に、いったいどういう意味があるんだろうということですね。それから第二問で比較の意味は何かということです。それぞれが比較をする場合に、どういうことを意図して、何を求めたくて比較するのか。

第三番目が、ロシアも中国もインドも、いずれも「我が道」を生き、「我が世界」をもっています。この前インド研究のある会合に出ましたが、インドが「我が世界」を持っていると同時に、インド研究者もものすごく「我が世界」を持っているんですね。中国研究者が話しても全然通じない。おそらくインド研究者からみれば、中国研究者も「我が世界」の中にいるのでしょう。そういう、いわば自分というものを強く持った、文明のある大国を相対化するというのは、非常に難しいことであります。地域研究者は外国のことをやっていますので、多分そういう相対化ができるんですが、本国ではこういう意識は全然生まれてこない。そこら辺で、現在ロシアとかインドとか中国で、自分を相対化した比較研究などというのは進んでいるのかどうか、というようなことを教えていただければ、大変参考になります。

少し長くなりましたが、あとはもうご自由に5分か6分という時間内で発言してください。あとは自由におっしゃって下さい。まず、田畑さんからお願いします。

(田畑) ありがとうございます。まず、毛里先生の問題提起に、感謝申し上げたいと思います。非常に素晴らしい問題提起だと思う理由の一つは、答えもほとんど書いてあるということで、非常に参考になりました。私の立場上、この三つの質問にそれぞれお答えしたいと思いますが、あまりまともに答えられないかもしれません。まだこのプロジェクトは一年目で、一年間何をやったのかと言われると、普段これまでやってこなかった地域についてようやく知り始めて、一緒に研究している人たちがどういう研究をしているのかをようやく知り始めたぐらいの段階ですので、ほとんどの問いに対してまともに答えられないと思います。

最初の地域大国を取り上げること、また地域大国でくくることの意味ということですが、これは世界システムをどうとらえるかということに関係するわけで、このプロジェクトを申請したときの基本的な認識としては、アメリカ、EU、日本という軸、あるいは米国主導の体制というのが世界の一方にあるというものでした。この体制が世界の政治や経済、あるいは文化までも牛耳っているというものです。しかし、現実の世界はそれだけではとらえきれないわけで、こうした体制への対抗勢力として、地域大国に着目した。つまり、こうしたアメリカ主導の体制に対して、異議を唱えられる勢力として着目したということです。

また、政治や経済のモデルとしても、これら地域大国はアメリカ型のモデルとは異なるものを提示しているように見えるわけで、そこに着目したわけです。これら地域大国に共通性があるという暗黙の仮説があるのかという問いに対しては、もちろん何らかの共通性があるのではないかと考えていますが、どんな共通性なのかと言われると、まさにそれがこのプロジェクトの目的の一つだと言わざるを得ません。五年間もやって何も出てこなかったらどうしようかという危惧もあります。ただし、われわれのプロジェクトは今回の世界金融危機の前に構想を申請したわけですが、この危機の中で中国やインドの発言力が非常に高まっていて、このプロジェクトの意義が高まっているようには感じています。

二つ目の比較の意味、比較の効用は何かということですが、これについてはまさに、個別性の解明と、一般性あるいは普遍性の抽出というふうに、毛里先生ご自身が答を言われているわけで、われわれのプロジェクトでもまさにこれを目的にしています。ただ個人的には、この新学術研究ではこの二つのうちのとくに後者、すなわち地域大国の共通性、一般性の抽出という方に力を入れたいと考えています。このプロジェクトに参加しているメンバーがほとんど地域研究者であって、われわれはその対象とする地域の特殊性や固有性、あるいは違いを強調することが得意なわけです。ですが、それではこのプロジェクトの成果が出てこないの、あえて共通性というか、何か一般性、普遍性に着目したい。そういうものに着目することによって、こうした地域大国の経済や政治のモデルが、何らかの新しいことを提示しているということを考えてみたいというのが狙いです。

それでは、とくにどのような共通性に着目するかということについて少しだけお話ししますと、経済に限っては、先ほどの講演の中でもありましたが、1990年代前半においてその自由化、対外開放が著しく進んだということが、一つの大きな共通性になっているわけです。ですから、特に経済については、体制移行の比較ではなくて、対外開放とか自由化の比較というふうに設定して、インドや、場合によってはサウジアラビアやトルコ等も対象に加えて、比較していったらどうかということを考えています。ですからこういう自由化、対外開放を1990年代前半に行って、地域大国は2000年代に著しい経済成長を遂げたというところを、何とか解明できればと思っています。

それからもう一つ注目したい共通性としては、またこれも経済が中心となってしまうのですが、やはり国家による経済への介入が大きいという特徴があります。それは国有の比重、国家による市場への制約、それから国家による対外経済関係への制約というようなところを見てもあると思います。要するに、国家の役割が大きいということが、アメリカの主導する世界経済システムに対する対応として、どのような意味を持っているのかということについても検討したいと思っています。ただ、この文脈で普通に考えると、国家の経済への介入が大きいということは、政治体制の問題ともすぐに結び付きます。ロシアとか中国だと、話は結び付きやすいわけですが、先ほどの絵所先生の話を知ると、この辺はや

はり、今後注意深く進めなければいけないのかなと思っています。

それから最後の質問ですが、これも非常に難しく、それぞれの国でこういう三大国を比較するような研究があるか、ということです。このことについては、この新学術領域研究を申請する際に、調べる必要があったので調べたわけですが、こういう三国を並べた研究は、なかなかないのではないかとというのが印象でした。要するに、中ロの比較というのは移行体制、移行経済の比較の枠組みでありますし、中国とインドというのも経済開発というような観点からいくらかあると思うのですが、こういう三つを並べて比較するというのはなかなかなくて、われわれのものが最初なのかなと思っています。

(毛里) ありがとうございます。模範解答を最初にいただいてほっといたしました。それでは近藤さんをお願いいたします。

(近藤) どうもありがとうございます、アジ研の近藤と申します。毛里先生から三つの質問をいただいているわけですが、その枠組みはすでに田畑先生からお話しになったと理解させていただいて、私はインドから見て、その質問にどう答えられるのかということに集中して、しゃべらせていただきたいと思います。

まず、地域大国を取り上げる意味ということですが、私はこの質問自体はそれほどあまり大きな意味がないと思っています。というのは、南アジア大陸でインドを取り上げようが、パキスタンを取り上げようが、それはそれなりの重要性があると思うからです。先ほどのセッションで、パキスタンとソ連、ロシアですか、を比較したらどうかというセッションが出ましたが、そういうような質問自体はそれほど意味がないと思っているということが一つです。

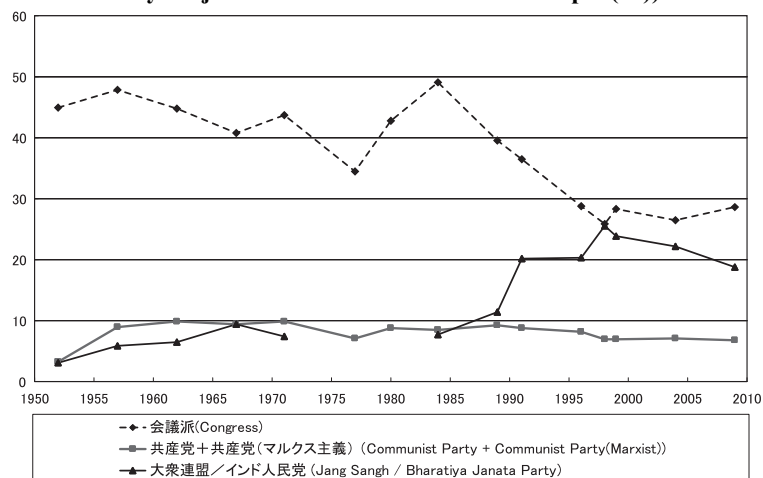
にもかかわらず、南アジアではやはりインドが地域大国であるということはまず間違いないかと思っています。どういう意味で地域大国であるかと申しますと、1971年の第三次印パ戦争で、パキスタンは東西に分裂してバングラデシュが生まれたわけですが、そのとき以来、南アジア大陸でインドの覇権に対抗する勢力は、まずいなくなった。そういう意味で、インドは南アジア地域の独立変数、すなわちメジャーパワーになったと言えるかと思っています。独立変数というのは、その周辺の国が何を言おうと独立で行動できるパワーだということの意味です。そのようなインドが南アジアで存在していくことの重要性は、やはりインドが安定した民主主義国であるということにあるかと思っています。

ここから第二番目の質問に対する答えに移らせていただきたいと思うのですが、やはり民主主義というのは普遍的価値であるということでありまして、三つの地域大国の比較の尺度として民主主義を用いるということは、ある意味で当然であるわけです。そこで、長年インドで培われてきた民主主義体制の特色を少しご紹介しまして、それをロシア、中国

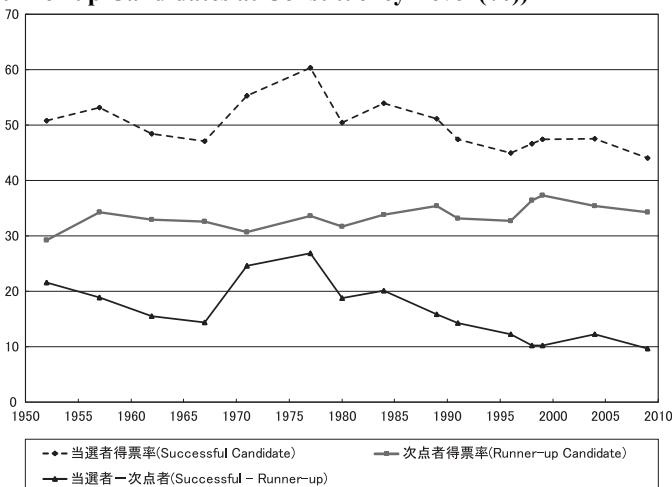
と比較したらどうかというのが私の意見です。

グラフ1は、インドの主要政党の得票率を示したものです。主要政党の得票率を1950年代からを時系列に書いたのですが、一番上の1950年代から60年代、70年代にかけて一番上にあるグラフが、インド国民会議派という、独立を担って1950年代、60年代の政権にあった政党です。ところが1970年代、80年代になりますと、その政党がどんどん票を失って、他の政党がのし上がってくる。そこで混乱しているような印象を受けますが、しかしグラフ2を見てみますと、必ずしもそうではないということが分かります。

グラフ1 連邦下院選挙における主要政党の得票率の推移 (%)
(Votes Polled by Major Parties in the House of the People (%))



グラフ2 選挙区レベルの上位候補への収斂: 当選者と次点者の得票率
(Convergence of the Votes of Top two Candidates: Votes Polled by Successful and Runner-up Candidates at Constituency Level (%))

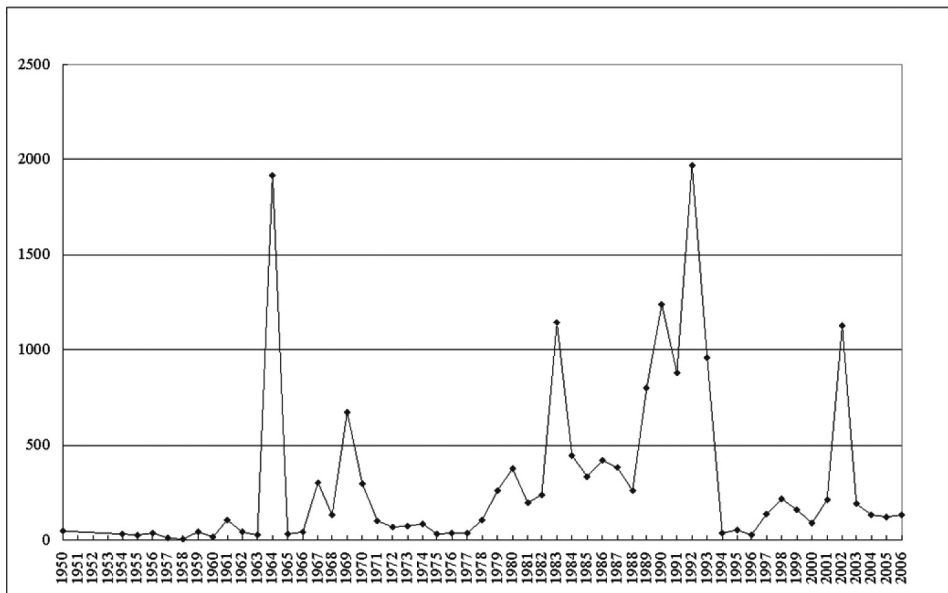


(出所) Election Commission of India (<http://eci.nic.in/>), various reports of Lok Sabha elections より筆者作成。

この表は日本の衆議院に当たる連邦下院選挙区543についてのものですが、その543議席の当選者と次点者それぞれの得票率の経年変化を示したものです。これを見るとお分かりの通り、1975年ぐらいまではいろいろ変動があるんですが、80年代以降になりますと、収斂しているということが分かります。小選挙区制を取りますので、こうなることは予想されるわけですが。このことから、インド社会のさまざまな勢力も次第に妥協的になって、収斂傾向を見せているということが言えると思います。

さらにもう一点示しますと、グラフ3は、ヒンドゥーとムスリムの宗教対立を示すものです。1950年代から90年代にかけて、これだけの両宗派間の対立による死傷者があったということを示したものです。このような対立が、とくに1980年代から90年代にかけてあるわけですが、それにもかかわらず、その宗教的少数派と、多数派のヒンドゥーの選挙における投票率（グラフ4）を比べますと、ノン・ヒンドゥーと書いてある宗教的少数派（そのうちの7割ぐらいはムスリム）の方が常に投票率が高い。つまり少数派は民主体制に対して信頼感を持っているというような状況がずっと続いているということです。

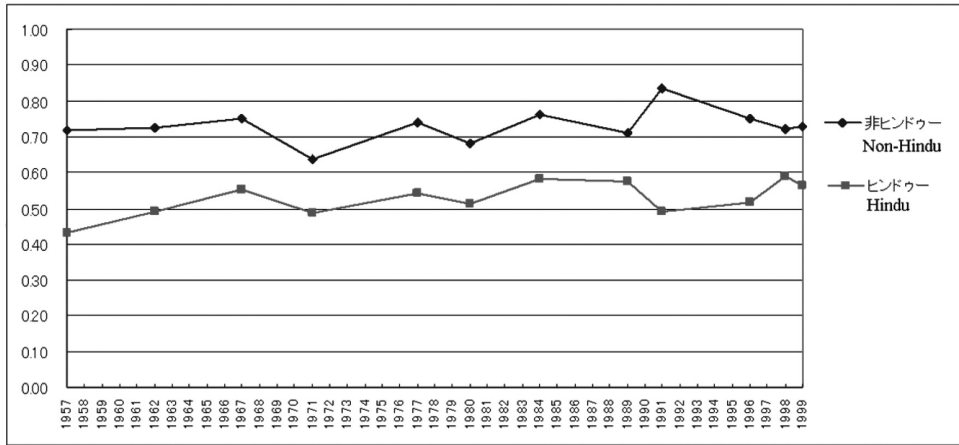
**グラフ3 ヒンドゥー・ムスリム宗派暴動における死者数
(The Death Tolls in the Hindu – Muslim Riots)**



(出所) 以下の資料より筆者作成。

Engineer, Asghar Ali [2004] *Communal Riots After Independence: A Comprehensive Account*, Mumbai: Centre for Study of Society and Secularism, pp. 223-224; Rajya Sabha [2000] *Starred Question*, No. 52, dated 26.07.2000; Lok Sabha [2004] *Starred Question*, No. 294, dated 21.12.2004; Lok Sabha [2005] *Unstarred Question*; No. 239, dated 26.07.2005; Ministry of Home Affairs [2007] *Status Paper on Internal Security Situation As on March 31, 2007*, ([http://mha.gov.in/internal%20security/ISS\(E\)-050208.pdf](http://mha.gov.in/internal%20security/ISS(E)-050208.pdf)), p. 37.

グラフ4 ヒンドゥーと非ヒンドゥー各々の投票率の推定: キングの生態学的推定方法の適用 (The Estimation of Votes Polled by Hindu and Non-Hindu by Gary King's Ecological Inference)



(出所) 近藤則夫[2009]「インド連邦下院選挙におけるインド国民会議派—経済変動と宗派間亀裂の影響」間寧編『アジア開発途上国の投票行動—亀裂と経済—』アジア経済研究所。

以上のような二つの点について私が言いたいことは、インドの民主主義体制というのは、1950年代から現在に至るまで、built in stabilizer と申しますか、信頼感を備えた復元力のあるシステムとして現れてきたということが言えるかと思えます。このような能力を広い意味で人々が得たということは、やはり民主主義と国家という問題を考える上では、どの世界でも非常に重要だと思えます。このような尺度を持って、今後民主化するかもしれない中国や、まだ権威主義と民主主義のはざまに動いているロシアというような世界を見たらどうかというのが、私の基本的な視点であるということが言えます。

時間もありませんので、最後の三つ目の点にまいります。市場化という点から見て研究があるかということですが、経済については絵所先生の方にお任せするとして、政治についてはインドから見た中国とかロシアというようなものは、ほとんど皆無であるかと思えます。ただし、インドでは州というのが非常に大きくて、インド一国でヨーロッパみたいなものですから、その州間の比較研究というのはかなりあるのですね。例えば自由化のポリティカルエコノミーというような主題に関しましては、アシーマ・シンハという人が複数の州を比べて、なぜある州は自由化でうまくいっているのに対して、違う州では同じ自由化というフレームワークの中でも、うまくいっていないのかというようなことを研究したものはあります。以上です。

(毛里) ありがとうございます。先ほど絵所さんからインドの民主主義についてお話がありましたが、今近藤さんから、やはりインド民主主義の基本的な復元力、あるいは

それへの信頼感というのでしょうか、体制内にビルトインされたという言い方をなさいましたが、それから州間の比較が行われているという、インドについて非常に興味深い点を提示していただきました。ありがとうございます。それでは天児さん、お願いします。

(天児) 早稲田大学の天児です、どうもありがとうございます。まず、なぜ地域大国なのか。その前に地域大国とは何なのか問題なのだと思います。今まで一般的に、定義的に言うとするならば、当然これは、ある一定の地域に対して影響力を行使する能力を持っているとか、あるいは自らの意志をその地域に反映させることができる、そういう国のことを地域大国と言っていたのだらうと思います。しかし、そう簡単には言えない。つまり、いまや非常に国際社会が複雑に入り組んでいる状況が生まれてきているということ。従って、一方で影響力を与えながら、同時に影響力を受けるというような、そういう関係が前提として存在しているということ、考えないといけないということですね。

それから、これは中国について申し上げますと、中国をいわばリージョナルパワー、地域大国として位置付けるべきか、あるいはグローバルパワーとしてとらえるべきかという議論が、今や出てきていると思いますが、その結論については、後でお話したいと思いません。実は、明日の朝日新聞に掲載されることになっている書評で、私が関わっている二冊の本があります。一つは関志雄さんの『チャイナ・アズ・ナンバーワン』という本ですね。それからもう一冊は、これは前の『ノーと言える中国』を書かれたグループの人たちが書いた『中国不高興』訳せば「不機嫌な中国」、正式な翻訳のタイトルは『中国が世界を思い通りに動かす日』とか、非常に刺激的なタイトルのついた本です。この二つの本自身が、いまやそのリージョナルパワーという中国の位置付けではなくて、グローバルパワーとしての中国を議論しているということですね。これを後で少し議論の材料にしたいと思いません。

私は、この地域大国ということを考えるときに、三つの視点から考えてみたいと思っています。まず一つは、関係性です。それから二番目は影響力、そして三番目は秩序形成能力という形で考えてみたい。関係性と言ったときに、ここでは経済的な関係で言うと、先ほどもちょっと申し上げましたが、もはや中国は世界の工場、世界の市場という言葉が象徴するように、まさにグローバルパワーとしてその関係をつくってきている。それから周辺地域においても、もう日本も含めて中国との貿易関係がそれぞれの国にとって第一になっているという状況があります。

あるいは、外貨準備高にしてももう圧倒的で、2兆4,000億ドル規模の外貨準備高を持っている。日本が第2位で、おそらく9,000億ドルぐらいですかね。つまり経済関係においては、もう明らかに中国はグローバルパワーになってきています。では安全保障はどうかというと、中国はアジアあるいは東アジアにおいて、着実にその安全保障能力を持つよ

うに形成してきている。それから安全保障上の地域協力という意味においても、例えば中国のイニシアチブで6カ国協議が進められています。上海協力機構（SCO）でもそうですね。

こういうものを見てみると、まさにリージョナルパワーとしての中国をめぐって、安全保障における関係性が生まれつつあることが分かります。そして経済協力の部分で見ると、FTAとASEANの協力を積極的に進めていくとか、あるいはGMS（Greater Mekong Subregion）計画を中国が地域協力として進めていくようになってきています。従って、いわば経済能力としてのグローバルパワーと、それから安全保障あるいはその経済協力としての地域の影響力、関係性というものを持ち始めているというわけです。

影響力の部分でいきますと、経済においてはすでに、中国は援助国になりつつあるわけですね。アフリカの援助についてはわりとよく言われますが、インドシナ半島における経済援助というものも、すでに積極的に始めてきています。それから、ソフトパワーとしての影響力の行使というものが、今非常に積極的に進められ始めている。これは孔子学院などはその典型だろうと思います。

しかし、政治の部分で見ると、中国はむしろ非常に受け身的であると言えると思います。先ほど塩川先生から、ゴルバチョフ民主化の失敗の話の中で、むしろそれを教訓にして中国が経済発展を中心とする展開をしたというお話がありましたが、それは確かに、最近で言えばワシントンコンセンサスから北京コンセンサスという議論の中に、そういう文脈で説明できるものがあると思います。しかし、私はやはり、中国は政治に関して言えば非常に受け身であるという理解をしています。これについては、後でその機会があれば、ここで説明したいと思います。

最後に、秩序形成の問題を少しお話ししてみたいと思います。やはり大国であるためには、その地域におけるある種の秩序を形成していくためのビジョンと実践が備わっていて、さらにそれを周辺地域が受容していくということの組み合わせが必要になってくると思います。中国がアジアにおいて秩序形成を本気で考えるようになったのは、そんなに私は古いことではないと思います。非常に典型的なのは、江沢民時代に——1990年代の終わりだと思います——ゴルバチョフが「ヨーロッパ共通の家」と言った言葉をもじって、「アジア共通の家」（アジア共通的家）という言葉を使っていました。ところが、その後中国はその「アジア共通の家」という言葉を使わなくなりました。今度は何を目指しているのか——どうも「中華秩序」という議論や主張が、いくつか出てくるようになってくると思います。

時間がもうありません。毛里さんの目がだんだんと鋭くなっていますので、最後に一言。何番目の質問だったか忘れましたが、要は何のために比較するのかということですか。つまり、比較の実践的な意義というのは、大国の地域における役割とか評価というものを行うことによって、つまり大国を牽制するとか、大国のバランス感覚というものを持ってもら

うということにあるのではないのでしょうか。例えば地域に役立つ、地域に貢献する大国なのか、あるいは地域を混乱させる大国なのか、あるいは地域を支配する大国なのかという、いわばその判断の視点から中国なりインドなりロシアを見ていくと、ある意味でそれはそれとして、意義があるのだらうと思います。

(毛里) 分かりました。中国のグローバルパワーに着目しながらお話ししてくださいました。最後のところで、実践的なものとして考えると比較の意味はかくかくしかじかだとおっしゃったのですが、たぶんスラブ研究センターでは、おそらくそういうことよりはもう少し学問的な方向を目指しているんだらうという気がしますし、また歴史的に古く遡ることができるものを想定しているような感じがします。例えば帝国というものをどういうふうに考えるか。今、中華帝国はよみがえろうとしているのか、あるいは、ロシアは帝国としてよみがえりたいと、一部の人は思っているわけですね。それでは高原さん、よろしくをお願いします。

(高原) 天児先生と併せて6分じゃないですよ（笑）。なぜ地域大国を比べるのかというところから私も触れたいと思います。何人かの先生がおっしゃったことをアンダーラインするだけかもしれませんが、BRICsという言葉ができて、そのうちのブラジルを抜いたら私たちの研究するこの三つの国ということになります。やはりこの三国がこれからどうなっていくのかということが、世界の秩序に対して非常に大きなインパクトを持ち得るということで、世界の注目が集まっていると思うのですね。その三つの国を比べることによって、それらの国をよりよく理解しようという趣旨ではないかと思っています。

その国際秩序の変動の可能性というのは、一つはもちろん国力が増大することによってもたらされる部分というのがありますね。経済力もそうですし、軍事力もそうだと思うのですが、それだけではなくて価値の問題があるわけですよ。こういった価値がこれからの国際秩序の中心的なものになっていくのかということを考える上で、この三つの国の動向というのは、大変注目されるころだと思います。

それから、今歴史の話が出ましたが、三つの国とも歴史的に非常に大きな国であって、国民統合をどうやって実現するのかということが、長期的な課題としてある国々だと思います。その国家の行方を考えますと、まさに今、グローバル化にせよ地域化にせよ、世界史的な一つの時代の中であって、こうした大国の国民統合がこれからどのように行われていくのかということに、注目が集まるのではないのでしょうか。その国民統合のためのいろいろな手段や仕組みとしては、例えばナショナリズムといった思想の問題もあれば、官僚制とか政党制とか、軍民統制を含む統治機構がこれからどうなっていくのかという問題もあります。あるいは経済制度もやはりここに関わってくるのではないかと思います。

先ほど政治と経済は関係ないという、非常に大胆な絵所先生のお話もありましたが、少なくともそのシステムの部分——政治システムと経済システムの間の連関性というのは、やはりあるのではないかと思います。例えば中国の場合ですと、先ほど中兼先生のお話にもありましたように、なかなか所有制への変換というのは徹底しない、時間がかかるわけですね。それはいろいろな理由があるのですが、一つの理由としては、今の共産党の政策で、国民経済の要の部分はそのままにとどめておくという政治からの要請が挙げられます。つまり、システムの部分では政治、経済の連動は確かに認められるのではないかと思います。

比較の効用という二つ目の問題について。これまで先生方がおっしゃったことに一点だけ、私なりに付け加えますと、私は中国を研究しているわけですが、他の地域大国の政治を理解するためには、比較政治学の教科書に出てこないものでどのような概念が使われているのだろうかというところに、とても興味があります。そういった、他の国で使われているその国固有の概念を学ぶことによって、例えば中国政治をよりよく理解できるようになるといった効用はないだろうか。

例えば中国政治で言えば、「関係」という言葉ですね、guān xi という、英語で言うと relationship とか connection とか personal relationship とか、そういうことになるのでしょうか。あるいは官僚制の中ですと、これはちょっと翻訳が難しいのですが、「条々塊々」という言葉があります。「条々」というのは部門の縦割りという意味で、「塊々」は地域ごとの指揮命令体系のことです。中国の場合、計画経済の下では、伝統的に縦割りの中央から下りてくる指揮命令系統と、それからその地方の指揮命令系統の間でよく矛盾が発生するわけですが、このことが中国の官僚政治を理解する上で非常に重要なポイントになっています。これは単なる例に過ぎませんが、固有の言葉すなわち概念について、他の国の例をいろいろと学びたいと考えているところです。

最後に、各国の動向といいますか、互いにどの程度気にしているのか、どれほど他の地域大国を気にしているのだろうかという点ですが、私の知る限り、すごく注目している面もあると思います。それは先ほど塩川先生のお話にも出てきましたが、例えば中国共産党はソ連共産党の轍を踏まないようにということをととてもとても気にしていますので、非常にたくさんの研究が内部で行われていますし、それからその後のロシアの混乱ぶりというものも大変強調されています。これは、ある種宣伝政策の一環として非常に強調されている面もあると思うのですが、今日の中国で、知識人の政治改革についての考えにインパクトを及ぼしているということがあろうかと思います。

あるいは、最近では中国人の間で、インドの地方ガバナンスに対する関心が昔に比べて高まっていて、どうもインドの地方へ出掛けて行って、実際にどのように地方が統治されているのか見学するようなケースも増えていると聞いています。他方、ロシアについて言

えば、最近新聞で見てびっくりしたのですが、統一ロシア党が中国共産党に大変興味を示しているのです。統一ロシア党と中国共産党の間に定期的な交流が持たれるようになっていて、その私が読んだ記事によりますと、中国では行政と立法と司法の間にしっかりと連携ができていますので、これはぜひロシアも見習いたいと言っているということで、より実践的な立場と政策的な立場の双方から、結構関心があるのだと思います。このように、それぞれの国の当局も、他の地域大国に注目することの必要性を感じているということについて、情報を提供させていただければと思います。

(毛里) ありがとうございます。いろいろ興味深いことを指摘していただいて大変ありがたいと思います。それでは最後は松里さんですね、お願いいたします。

(松里) 友人が外国からたくさん来ていますから、英語でしゃべります。どうぞご配慮ください。

現地調査のノウハウはこの新学術領域研究の成功のために非常に重要だと思いますので、やや具体的になりますが、それについてお話しします。

地域研究には二面性があり、一方では研究対象国についての具体的知識、とりわけ言語能力を持つことが必要です。研究対象国の公用語が自在に操れなければなりません。他方、ディシプリンの知識もなくてはならない。たとえばロシア語をよく知っていても、ディシプリンとしての宗教研究の知識がなければロシアのイスラームを研究することはできません。その国についての知識とディシプリンの知識を習得する必要があります。これが地域研究の二面性です。

言葉を知らない国でフィールドワークをした経験が何度かあります。たとえば2004年にはポーランドで仕事をしました。ポーランド語は読めますが話すのは苦手なので、ロシア語で質問してポーランド語で答えてもらうよう面談相手をお願いしました。しかし、この方式では政治家は面談には応じてはくれませんので、インテリ層としか話ができませんでした。2007年にはトルコで現地調査しました。私はトルコ語を読むことも話すこともできないので、さらに難しい立場に置かれました。このときも英語ができるインテリ層、ジャーナリストとしか話せませんでした。政治家はもちろん、官僚とさえ話せませんでした。しかし、私について言えば、この新学術領域研究につながるアイデアは、私が言葉を知らない国で現地調査をしている間に思いついたのです。つまり、地域研究者にとっては言語能力が死活の意味を持つけれども、地域研究者はどこまで言語の壁に縛られるべきなのかという問題です。

自分が専門としない国での現地調査は、ほぼ100%通訳の質によって決まります。通訳の質が調査の質になります。ですから私は、ロシア以外の国の専門家がロシアで現地調査を

希望する場合、通訳を引き受けることにしています。明日、報告する東京大学の田原史起教授は中国の地方制度、農村統治がご専門ですが、私たちは、この9月にロシアの田舎を2週間旅行しました。一緒にヴォルガ川の漁師の家にホームステイし、とても面白い経験をしました。私は通訳としてお手伝いするつもりだったのですが、田原教授の専門知識、研究スタイルから多くを学びました。トルコとポーランドで調査したとき、もちろん私は自分自身を観察することはできませんでしたが、専門外の国で田原教授がどう調査するか間近で観察することができました。田原教授はもちろん中国を熟知していますし、ロシアで調査していても教授は常に中国のことを考え、彼の意識はいつも中国に戻っていました。そういった意味で、地域研究と比較研究の間に矛盾はありません。自分の研究対象国をよく知っていれば、それ以外の国と容易に比べられます。

このシンポジウムに向けては、私はトルコ専門家である澤井史子教授と共同でペーパーを書きました。ただし書く対象はスワップしました。彼女はロシアについて書き、私は中国について書きました。研究対象国のスワップは、本新学術領域が続くあと3~4年間で、できるだけ実践すべきことです。ロシアの専門家は中国やインドに行き、インドの専門家はロシアに行くといった具合で。ロシアで現地調査するために通訳が必要な場合は私がお手伝いします。ありがとうございました。

(毛里) どうもありがとうございました。何か煙に巻かれたという感じですが、でも大変よく分かるお話ですね。つまりわれわれは今、比較研究をこの地域大国の間でやることにどういう意味があるのかということ、取りあえずまじめに考え始めるべきだというのが松里さんの提起なのでしょう。松里さんがおっしゃるのは、非常にコンクリートな意味での、文字通りの比較研究というよりも、地域研究者のスワップということですね。これは非常に大事なことだと思います。地域研究者が自分の研究以外の他国に接することによって、自分の地域研究に裨益するところが非常に多いということが、意外にあると思います。これは、とくに地域研究者が相互に浸透し合うという意味では、大変大事な指摘であろうと思います。例えば、私はロシア研究に手を伸ばしていきたい。中国をやるよりロシアの方が面白そうだと思いますから。けどなかなかそれは許されない、自分の地域研究で手いっぱいということもあって。スラブ研究センターの方々の状況を非常にうらやましいと思います。松里さんあるいは田畑さんのそういう経験を聞かせていただきたいと思います。

今五人の方に取りあえずお話ししていただいたので、あとは完全に自由に、40分の時間を全部開放したいと思います。今日五人の方がお話したことに対する異論や質問、それに私が最初に提起した問題に対して、これは下らないとか面白いとかおっしゃって下さって結構です。

それから、今日午前中、塩川さんと中兼さんと絵所さんという、立派な三人のスカラー

が貴重な報告をなさいました。これを十分に議論する時間がなかったのも、これをあらためて取り上げて、ここで議論して下さっても結構です。議論の後、絵所さん、中兼さん、塩川さんの三人の方には、個別に発言していただきたいと思います。そういうことで、40分アナーキーを楽しみたいと思いますが、いかがでしょうか。よろしゅうございますか。

発言したいとおっしゃる方、手を挙げてください、何でもいいですから。大変恐縮ですが、質問は2分以内をお願いします。お名前と所属をおっしゃってください。よろしくお願いします。

(リン) 中国国務院発展研究センターのリンと申します。ほかの用事で東京に来まして、ついでに今回のシンポジウムに参加しました。今日はいろいろ刺激になりました。私がいるところは中央政府に政策提言をするところです。毛里先生の問題提起に何のための比較かというものがあつたのですが、比較というのはよく使われる研究手法の一つの基本手法です。その目的は非常に明確です。他の国はどうやっていて、いいところは何か、失敗したところは何か。それで最後に、必ず政策提言のところはその成果が現れます。ですから、目的は最初にありますね。それは中国にとって参考にするためにほかの国の経験を見ると。

改革開放以来、最初はやはりアメリカ、欧米先進国、日本、こういう国とだけ比較をして、その経験を取り入れようとしていたのです。最近になって、それだけを見てはやはり不十分であると言われるようになりました。ほかのところにも、例えばラテンアメリカ、ロシア、インド、そういう国々にも目を向けて、それぞれの成功したところを参考にし、失敗したところをどうやって避けたらいいかという研究のテーマもあります。

それからもう一つ、比較することの意味に関して、私は最近、空間経済学の大家である藤田昌久先生からこういう話を聞きました。二人の知恵のモデルを考えた場合、もしその二人に全然共有知識がなければ対話ができない。しかし、共有知識がたくさんあればあるほど、それぞれ固有の意味もなくなってしまう。ですからある程度の共有知識を持って、それからある程度の固有知識を持っていることが、イノベーションの土台になると。ですからこういう国別研究をやっている学者の間にも、国の体制や慣行など、かなりある程度の共有知識があるのですね。その一方で、たくさんの固有知識もあります。そうした中で知識の交流が、それぞれに対していい刺激になって、知識のイノベーションにつながるのだらうなと思います。

(岩田) 岩田昌征と申します。所属は一応、今はもう自由ですが、セルビア科学芸術アカデミーの会員というところです。単純な質問をいたします。まず、インタープリターの役割ということですが、これは非常に重要で、とくに紛争研究などの場合には、インタープ

リターが意図的に誤訳をするというのが非常に多いですね。私も日本のテレビで、1990年代のバルカン戦争に日本から行った有名人の話を聞いていましたら、セルビア人の老人が、クライナから家族が全員引き揚げたけれども自分は自分の意志で残ったと言っているのに、インタープリターは英語で「私は置き去りにされた」と訳しているのです。そうすると日本人は、「セルビア人ってひどいですね」と言います。そんな単純なことから生まれる誤解がたくさんあるので、そこはぜひ研究者に気を付けていただきたいと思いますね。自分が知らない言葉の国についてあんまり語らない方がいい。これが第一義だと思います。

それから、地域大国の定義の中に核兵器の保有というものはあるのか。これは必要条件であるのかなのか、ということです。

それから第三に、中国がグローバル大国になるという可能性について言われましたが、アメリカとかアングロサクソンの世界勢力というのが片方にあるわけです。そのグローバル勢力に対抗したところは、70年か80年ぐらいたつと負けているわけです。平和的に負けるか戦争をして負けるかの違いはありますが、フランスがそうであったし、ドイツがそうであったし、それから大日本帝国も、ソ連もそうです。こういう法則性みたいなものを見ると、1949年に成立した中国が2020年とか2025年ぐらいにアングロサクソン、アングロアメリカン系の勢力にしてやられて、敗北するということはないか。こういうことです。

(ヴァクラブハラナム) 近藤教授に質問です。質問はインドのことについてですが、別の地域大国についても当てはまるかもしれません。

インドの民主主義についてお話を伺い、インドの民主主義に関する興味深いグラフをたくさん見せていただきました。仮に経済的不平等のグラフを描いたとしたら、経済的不平等の拡大と民主主義の深まりに相関性が現れると思います。経済的不平等の拡大に伴って民主主義が深まっても、何の意義があるのでしょうか。それは単なる民主主義の一形態にすぎないのでしょうか、それとも本当の民主主義と言えるのでしょうか。最大の事例は、1991年以降の経済改革です。特別経済特区をはじめとして、インドに導入された経済改革の多くは、平等な発展という意味での民主主義を考慮しないものでした。

そこで質問なのですが、平等を促進するという意味での経済の公正な発展なくして、民主主義を深めるという議論のポイントはどこにあるのでしょうか。平等な発展において、民主主義は可能なのでしょうか。

(岡田) 法政大学の名誉教授の岡田と申します。今日は中国専門家がこれだけ豪華に顔をそろえたものですから、前々からぜひ聞いてみたいと思っていた質問をしたいと思います。先ほど高原さんのご報告に、「条々塊々」という話が出て、非常にこれは面白い話だなと思っています。というのは、中国を研究するときに学会で必ず問題になるのは、経済的には

資本主義的に見えるし、政治的には社会主義的に見えるということなのですが、私は当面暫定的な形として、山田盛太郎ではないが、政治的には社会主義的で経済的には資本主義的な体制として理解したらよかろうというように、アドホックに考えています。やはりこの三つの大国を考えますときに、それぞれ独自の歴史を持っているわけですから、歴史的な社会としてこの三つをよく理解する必要があるだろうと考えます。

そういたしますと、これは大ざっぱな話ですが、ヨーロッパ起源で考えますとインド、ロシアの方はその周辺として理解することができるでしょう。それに対し、中国は独立した歴史、独特の文化を持っている国だと言えます。そうしますと、中国史は世界史の大きな流れとはかなり孤立して、独自に理解する必要があるのではないだろうか。そう考えた場合に、中国の現状分析をする上では、田畑さんも言われたように、非常に大きなパワーとして経済的には登場しつつあるわけですが、やはりこの中国の歴史、皇帝制と官僚制、易姓革命の歴史ということも考え合わせて見ないと、中国の言論界というものは理解できないのではないだろうと。

こうしてみますと、「条々塊々」ではないのですが、かなり地方の経験というものが強化されていて、伝統地域にしても特権腐敗にしても、中央と地方の政治の対立は非常に大きいのではないだろうか。そう考えると、安祿山ではないのですが、皇帝制、官僚制の統一が毛沢東以来きちんとされてきたけれども、長期にわたって徐々に解体しつつあって、今はこの地方の権限が非常に膨れ上がっているのですね。腐敗がそちらの方へ移行しつつある。いうならば、中国の独特の社会としての解体過程に、一歩入りつつあるのかなと考えているわけですが、これはまったく素人の発想でございまして、高原先生でも毛里さんでも天兒さんでもどなたでもいいのですが、ご教授いただきたいということです。

(宇山) スラブ研究センターの宇山です。このプロジェクトの第4班の班長をしています。今、中国とインドには非常に勢いがありますので、中国研究者とインド研究者はそれぞれお国自慢をして、勢いのないロシアの研究者は模範解答をするか煙に巻くという恰好のようですが。(笑) 私は中央アジア研究者で、ロシアにも中国にもインドにも行く機会がありまして、ロシアに行くより中国やインドに行く方がずっと楽しくて、とくにロシアにシンパシーはないのですが、あえてロシアも地域大国なんだという話をして、インド研究者、中国研究者の方々への質問につなげたいと思います。

ロシアの財産というのは、逆説的ながら、かつてのロシア帝国やソ連の領土のかなりの部分を失ったために、そのロシア帝国やソ連の中で一緒に暮らしていた人々がつくる国がたくさんできたということですね。ニュースでは、グルジアやウクライナなどの反ロシア的な国のことがよく話題になりますが、あれはむしろ例外的で、ロシアと仲のいい国の方が多いし、グルジアやウクライナの中でもロシアと非常に深いつながりを持っている人た

ちがたくさんいます。

そのことが微妙に政治体制とも関係していて、旧ソ連諸国の中でロシアの法制度にモデルを採った制度を持つ国がたくさんあります。それから権威主義体制ということで言えば、ロシアより先に権威主義を確立させた国が少なくありませんが、それでも統一ロシアのような巨大与党の形成など、政治テクニク、テクノロジーの方面でロシアの影響は非常に大きい。ですから政治体制や政治制度の影響力ということで言うと、ロシアは確実に影響力を持っているわけです。

それに対して、中国やインドはどうだろうかというのが、私にはよく分からないところで、中国だと北朝鮮やミャンマーの体制維持に影響があるのでしょうか。また、麻生さんが「自由と繁栄の弧」構想で民主主義国インドとの協力を非常に重視するというのを言われたのですが、果たしてインドの民主主義が周りの国に伝播するというようなことがあるのかなというのが、常々分からないところなので、教えていただければと思います。

(荒木) 武蔵野大学の荒木と申します。毛里先生の三つの問題提起は、私どもがいつも思っていたことを聞いていただいたという気がして、ありがたく思います。比較するという事は何かということですが、比較の基準を見いだすことだと思うのです。リンゴとミカンとモモを比較する場合は、漠然と比較できないので、甘さという基準を設定すれば比較できるわけですね。そうすると、ロシアと中国、インドの三つの国を比較する場合の比較の基準は何かということ、はっきりさせていただきたいと思います。

二番目は比較の効用ですが、これは結論から言えば、何もないということですが。要するにAとBとCが違うといっていることは、単にAとBとCが違うという分類をしているだけですね。分類は何かというと、これは知覚です。現状をどういうふう知覚しているかという知覚の一つの形態だと思います。だから国際政治をどうパーセプションするか。徐々に世界は少しずつ変わってきて、複雑になってきています。新たな価値が出てきているので、それをどう理解したらいいかのためにこの比較を行う、その現状の認識だと思います。そこから先何が出てくるかという、結論から見ると何も出てこないだろうと。

つまり予測を伴う議論であれば、単なる分類学に等しいのではないかと思います。先ほどの天児先生のご発言の中に実践という言葉が出てきたと思うのですが、現状を把握するとその現状をどう思うかという感情論で、価値判断が入ってしまいそうです。その先に出てくるのが評価であり、行動であり、実践ですから、おそらくそういう問題と深くつながっていくのではないかと思います。

(家田) スラブ研究センターの家田です。皆さん、五人の先生方にお伺いしたいのですが、市場または権威主義、資本主義、社会主義を基準に分類する、つまり西洋で生まれた西洋

の政治、経済を分析するツールでもって、切っていったらこうなりましたよ、というのは、あまり面白くないというか、あえて日本でこの三つの国を比較することの意味は少ないだろうと思います。

それならば、もっと上手に切って行ってほしい。あえてこの三つの国を選んで、われわれ日本人ならば、そういう限界がありますよと指摘して、新たな指標を挙げるとか。そういう意味では、田畑さんもおっしゃったような別な相互理解を目指して、実は自分たちの国を判断するときに、これでもって判断していますよというものを鍛え上げて、それがまた別な基準の指標になるようにするといったことが、地域研究に課された非常に大きな課題だと思うのです。そのような挑戦をぜひ行っていただきたい。市場、社会主義、資本主義に代わるような指標をつくり上げていくという方に、ぜひとも行っていただきたいと思います。

(毛里) どうでしょうか、あと五人の方に戻して、五分ずつでお話しして締めの方に行きたいのですが。その前に、塩川さん、中兼さん、それから絵所さんのお三方にお話しただいて、その後で五人の方に答えていただくという、そういうことでいきましょうか。では最初に塩川さんをお願いします。

(塩川) 前半部でしゃべり過ぎましたので遠慮しようかなと思いましたが、振られましたので、毛里さんから出された三つの問いのうちの三番目について、思い付いたことを話させていただきますと思います。

先ほどの五人の方々のこの問いに対する回答は、一線の研究者のことを念頭に置いて、本格的な比較研究があるかどうかという答え方をされたと思うのですが、私はもうちょっと漠然とした知的ムードみたいなことを考えた場合にどうかということについて、思いつきのことを述べさせていただきます。確かに三国とも比較や相対化に無縁の知的世界にあるという見方もあるかもしれませんが、実は、ロシアは中国やインドとはこの点で少し違うのではないかなという気がしています。

というのは、長期的な歴史や文明という観点から言った場合、インドも中国も、何千年という歴史を持っていて、それぞれ偉大な世界宗教・世界文明を生み出したという点からも、ある時期においてはそれ自身がすなわち世界だ、という自己意識をずっと持っていたし、その伝統が今日まである程度影響しているのではないかと思うのですね。それに比べるとロシアは、せいぜい千年ぐらいの歴史しかなく、しかもその中心であるロシア正教というのは、自分が生み出したというよりはヨーロッパからやってきたキリスト教のうちの一派にすぎない。

ですから、非常に長い間、ロシアはヨーロッパとの関係というものをずっと意識して、

ヨーロッパに対して、一方におけるコンプレックスと、他方におけるライヴァル意識との間でさいなまれ続けてきた。そういう意味では、ずっと相対的な意識を持っていたと思います。ソ連時代には欧米に対抗する一方の旗頭として世界の中心になるんだといった意識が生まれていたのも確かです。しかし、今ではそういう意識もなくなったということで、また再び混乱しているのだと思います。

もう一つには、ロシアはヨーロッパのことを非常に強く意識しているのに対して、アジア、極東の方はそれよりも意識が弱いのではないかという気がします。確かにロシアの領土は極東まで伸びているわけですが、人口も希薄だし、これといった大中心地がない。何といってもロシアの中心はモスクワ、ペテルブルクにあるものですから、これは私の乱暴な偏見ですが、ヨーロッパに対する比較意識に比べると、東アジアとの比較意識は相対的に弱くなりやすいのではないかと。そうなっても仕方がない条件があると思います。だから、そういう意味では、ロシア・中国・インド比較というこの枠組みに、少し取り込みにくいところがあります。

ただ、やはりこれから先の将来においては、ロシア人もそうは言っていられないはずではないでしょうか。ヨーロッパとの関係、東アジアとの関係をそれぞれ考え直して、世界の中の自分たちの相対的位置を考えるという方向に、これからのロシア人は進んでいくかもしれないというのが、期待感をこめての非常に雑ばくな感想です。

(毛里) ありがとうございます、大変よく分かりました。余計なことをちょっと申しませんが、まだサンクトペテルブルクがレニングラードと言っていたとき、私はそこで、レーピンの美術館を見たいと言ったのですね。そうしたらロシア人は、本当に私をばかにして、「あなた何ですか。何でレニングラードにいてエルミタージュへ行かないのですか。レーピンを見ても何の意味もないでしょう」と言うのです。ロシアには芸術も何もなかったのだと。やはりロシアというのは、今まさに塩川さんがおっしゃったように、ヨーロッパでありたいというのと、ヨーロッパでないという反発との間に、おそらくまだ揺れ動いているのかもしれないという感じがして、今のお話は本当によく分かりました。それでは、恐れ入りますが中兼さん、お願いします。

(中兼) 今までの議論にコメントや、一部質問もありましたので、少し述べさせていただきます。最初は家田先生の発言ですが、はっきり言いますと、私はどうしても納得できません。つまり、既存の学問体系がありまして、それとは別に新たなのをつくるというのは、一世紀ぐらいかければできるかもしれませんが、実際にはそういうのは無理で、それよりも既存の概念とか枠組みでもって切って、説明できるものとできないものを区別するというのが、私は比較の方法として正当ではないかと思うのです。

よく新たな経済学をつくるとか、何かそういうことが今までにも言われたことがあったのですが、だいたい成功した試しがない。例えばコルナイ先生も反均衡論というのを書きまして、要するに新たな経済学をつくると言っていました。今までの新古典派は枝葉ばかりやっている、そこに力をそそぎ過ぎたと。もっと新たなシステム論的な経済学をやれば、新しい経済学ができるのだと彼は言ったわけですが、実際にはできないと思います。そういう意味で、実は東京大学の岩井克人氏が言うのには、ちょうど国際言語で英語が共通語になるのと同じように、経済学では、それがいいか悪いかは別にして、新古典派的な経済学が共通言語であると。従って、新古典派的な経済学でもって新古典派を批判するというのならいいのですが、別な言語でもって新古典派を批判するということは結局できないと思うのですね。有効ではないという気がします。これが一点ですね。

もう一つは、歴史の問題ですが、今の中国を考えますと、やはり歴史の重みというのを考えるわけです。よく革命と伝統ということが前から言われていますが、毛沢東によって変わったように見えて、実際には伝統がずっと続いているのではないかと。毛沢東というのはまさに皇帝であったという意見です。それは別にして、やはり歴史というものが今の中国にも大きく作用しているのは事実です。例えば、先ほど私は「精神」とか「真意」とかメンタリティーと言いましたが、中国の人のメンタリティーと日本人のメンタリティーは違うと思うのですね。日本人の方がはるかに集団主義的で、中国人の方がはるかに個人主義的だと思います。社会主義時代は集団主義という、いわば仮面を被っていただけだという気がします。

今は個人主義というのでしょうか、村松先生は個別主義と言いましたが、それがもう前面に出ている。それが中国のダイナミズムを突き動かしているということです。それは一面において、中国の経済発展を促し、ある意味で中国を統一する力を持っていると言えると思います。ですから、天児さんと高原さんにお伺いしたいのですが、そういう経済成長が人々に自信を植え付ける、中華アイデンティティーをもたらすということがあると思うのですね。他方で、先ほど出ましたが、地方利害が出てきて分裂的になるという経済成長は、ある意味で分裂と統一との二つのベクトルを持っているのではないかという気がします、その辺をぜひ、高原、天児両先生にお答えいただければと思います。

(毛里) ありがとうございます。とりわけ中兼さんの今のご発言の前半の部分は、非常に大事な問題だと思いました。つまり比較研究というのは、その中でどう見るかどうかということですね。私が比較研究を考える場合には、基本的に中兼流です。つまり今まであった概念、西欧的な歴史あるいは経験則によって、だいたい整備されたものに合わせたときにどうなるかというのが、比較の基準になっている。新しく突破していくということは非常に難しく、その場合唯一言えることは、西欧的なモデルとか概念では分析できませ

んということくらいでしかないのですね。そうしたら、時間がかかっても、やはりその中から何かを開発しなければいけないということになると思います。

それでは最後に、絵所さんをお願いいたします。

(絵所) いくつかばらばらにお答えします。最初は、印中比較や印口比較があるかというご質問です。印中比較に関しては、経済学の分野ではたくさんあります。欧米のジャーナリスト的な人の書かれたものも沢山ありますし、世界銀行やIMFでも積極的に研究をしておりますし、インド人の研究者もたくさんやっています。最近では中国人の研究者も英語で書きますので、ざっと眼を通して限りでは所得分配の比較とか、開発や産業に関する研究はたくさん行われているようです。しかし印口比較はない。これは見事にありませんね。まったく興味がないのか、経済関係で両国を比較する試みを、私はまるで見たことがありません。

ネルーの時代、インドはソ連の開発システムを相当導入しましたので、あのころは結構ソ連の研究者がインドに来て、インド論を書いていたのがありました。非常に独特な、当時のロシア風マルクス主義の結構いい研究です。しかし、今はその伝統もなくなりました。直感的に言って、インド人は、どことなくロシア人を見下しているところがあるように思えます。インド人はロシア人に対して魅力をまったく感じていないところがある。外交的にはロシアから軍事支援がありましたので非常に大事にしていたが、人々の感情レベル、価値レベル、生活レベルでは、まったく共感がありません。インド人の興味が、ロシア文化よりもはるかにイギリスやアメリカの文化にあるのは、間違いないところです。

一方、中国に対してはとてもコンプレックスがあって、1962年に印中戦争で負けたことが大きな傷になっているように思えます。そのためか、中国と比較することにはものすごく興味があります。ほとんどのインド人の優れたエコノミストの評価は、やはりインドは中国には経済的には勝てないと判断を下していて、自分たちが生きている限りでは、インド経済が中国経済に追い付くことはないというのが常識になっています。両者の間には、かなり大きな差があるという評価をしていると思います。

政治と経済の関係がないというのはおかしいと、先ほど高原先生からご指摘がありましたが、そんな乱暴な議論はしておりません。民主主義や権威主義といった政治体制と、経済成長との間の関係を問うことには意味がないと言っているわけです。政治と経済が密接に関係しているのはその通りですが、両者の関係はもっときめ細かく複雑で、どういうレベルで関係しているのかという研究を進めることをお願いしたいということでもあります。これまでの研究は、政治体制と経済成長の関係をクロスセッションでやっているだけで、どう読んでもそれほど意味があるとは思えません。政治と経済の関係にもっと深く踏み込んだ研究をしていただければありがたいということです。

最後に大きな問題です。先ほど家田先生と中兼先生がおっしゃったことに関係してしまっていて、まったく私も中兼先生のご意見に賛成です。インド独立前に、ヒンドゥー教の概念を基にした経済学はできないか、などと試みたインド人もいましたが、まったく無理でした。西洋の拡大過程の中で、近代諸科学の概念が流通し、一個の普遍化した分析方法となってきたわけです。そういったきわめて長いプロセスを振り返ってみると、そう単純に取って代わることはできないし、まったく別の言葉で語ってしまうのでは、いい研究はできないと思います。

私が最も尊敬しているエコノミストの一人アマルティア・センは、インドのベンガル人ですが、もし彼がベンガル語で書いたら外国人はほとんど誰も読めませんね。彼本人は独特の文化の下で育った人で、少年・青年時代独自の教育を受けたわけですが、自分の経験を生かして研究成果として発表したときには、やはり英米で出来上がってきた厚生経済学の言葉に置き換えたわけです。このプロセスがすごい。つまり自分の個別的な経験を普遍的な言語でうまく訴えて、しかも今まであったその厚生経済学の限界を指摘できたということに、彼のすごさがある。これはロジックの見事さであって、しかも読むと内容自体は大変にインド的です。しっかりと自分の経験に基づいているけど、それを普遍的な言語で表現しています。相手の土俵に乗って、その上でどこまで遠くに行くかというのをやらない限り、学問は進歩しないと思います。

そう簡単に新しい言葉を出せば学問になるというものではない。今までの言葉と比較して、どこがどう優れているのか示さない限り、次の一步は出ないと思います。特に経済学では、何かまったく別の、新しい体系を作ろうとしてもなかなか無理ですね。今までの積み重ねを検証していくことで次の一步があるわけですから、そういう積み重ねをやらない限り意味ないと思います。

(毛里) どうもありがとうございました。今の悲観的なお話は経済学のお話で、政治学、社会学はまだ展望ありと考え、挑戦したいと思いますが。

いろいろと、かみ合っていないようでもかみ合っていて、やはりとても面白い議論がこれまでのところできたと思います。それで、あと五人の方にどう締めていただくかということが、一番大事なポイントになってきますが、今まで出てきた問題提起のうち、私の主観からぜひ答えていただきたいということをいくつか挙げてみます。もちろん無視して下さってもいいのですが、記憶の掘り起こしというところでちょっと振り返ってみます。

まずは岩田さんから、地域大国は核大国だ、これは必要条件かどうかということでした。これは結構大事なポイントです。また、中国がグローバル大国になるということは、いったいアメリカとの関係でどういうことを意味するかというご質問だったと思います。それから、ヴァクラブハラナムさんから素晴らしい質問をいただきました。いわば公正なる市

場経済というようなことと、民主主義あるいは非民主主義というものの関係をおっしゃったように思いますが、これは近藤さんに、インド民主主義を擁護するという立場から答えていただきたいと思います。

それから宇山さんからは、ロシアの一つの特徴として、周辺に対するロシア的な感覚というのでしょうか、あるいは放射する意識のようなものがあるのだが、インドや中国などの場合には、周辺と自らとの間でいったいどういう関わりを意識しているのだろうかというご質問だったと思います。それから家田さんの議論は、比較研究をやることによって、それぞれ何が突破口になるかですね。これらのことについて、もし今考えていらっしゃるものがあれば、ぜひお話ししていただきたいと思います。それから中兼さんの方からは、特に中国の高原さん、天児さんあてに質問が出ていますのでぜひお答えください。

今お話ししたのは非常に断片的ですが、あと気が付かれたところや、最初のクールで言い足りなかった部分などがありましたら、ご自由に述べていただいて結構です。時間がとにかく五分しかありませんので、有効に使いながらご自由に発言していただければと思います。田畑さんからよろしいですか。お願いいたします。

(田畑) どうもいろいろありがとうございます。繰り返しになるかもしれませんが、比較したら何が出てくるかというところで、各国の固有性についての理解が深められるというのは、非常に明かです。すでに経済のグループの中でも、やはりほかの国と比較することで、今まで見えなかったロシアの特殊性といった面が明らかになってきたということが、大いにあると思います。もう一つの問題は、何か普遍的なもの、共通性というところで、やはりディシプリンを非常に意識せざるを得ないということです。よく地域研究者とディシプリンとの対抗みたいなことが言われますが、経済学と同じディシプリンの研究者グループの中に、インド経済をやっている人とか中国経済をやっている人がいると、ディシプリンについて意固地にならずに自由に議論できるようなところがあります。われわれはディシプリンの研究者と議論していると、いやロシアは特殊なんだというようなことを言い張るわけですが、むしろそうではない議論ができるのかなということを少し感じています。

方法論は非常に難しく、先ほどの比較の基準を何にするかというのは、結局何を比較するのを重要だと考えるのか、ということとも深く関わっています。その場合に、経済で言えば、新古典派のものだけでいいのかということについては、私は何ともまだ言えないところがあります。今回の経済金融危機の中で、新古典派の議論だけでずっと続けていいのかという反省も出てきています。われわれが申請したときには、ディシプリン研究に対するフィードバックもあるかもしれないようなことを少し書いているわけで、何かそういう面でも追求できないかと考えています。これは大変なことだとは思いますが。

それから、中兼先生の先ほどの講演の中で、やはり非常に面白いと思ったのは、何を比較するかどうかだけでなく、その比較したものの中でどういう順序付けをするかというところだと思います。だから比較が単に分類に終わるのではなく、何か立体的な比較ができればいいのかなと思います。ただ、中兼先生が言われた「精神」というものの中には非常にいろいろなものが含まれていて、政治の上部構造から一般大衆の資本主義的精神みたいなものまで含まれているので、それらをきちんと整理して考えていけばいいのかなと思っています。

最後に核兵器云々という話ですが、われわれがこのプロジェクトを考案した時は、1990年代初めからの世界秩序とアメリカの一極集中を考えていて、アメリカを支えるEUと日本、それに対する対抗勢力というような位置付けをしたところから始まっていますので、必ずしも核兵器だけですべてを考えるというようなことはなかったわけです。

それから中国については、もちろん今グローバルパワーとして勢いをなしているのは確かだし、おそらくロシア人も、ロシアがリージョナルパワーだと言われたら怒るのではないかと思います。自分たちはグローバルパワーなのだ。ですから、やはり世界のシステムを全体的にとらえて見ることを、出発点としているということです。

(近藤) 地域大国であるための条件として、核兵器保有が含まれるかについては、やはり現状では、国際政治の次元で考えますと、必須な要素じゃないかと思えます。インドの大半の政治学者もうすうすう考えているのではないかと思います。というのは、やはり核兵器を保有してこそ、メジャーパワーとしての独立性というのが出てくるということに起因していると思えます。

あと、まとまりのあるお答えはできないので、個別の質問に答えていくような形になってしまいますが、ヴァクラブハラナムさんの質問に関してお答えしたいと思います。民主主義の実質的深化と経済的不平等が長期的に両立することは非常に難しいと思えます。そのような不平等は、特に農村地帯などで、下から上のレベルまでのコミュニケーションの大きな障害になり得るからです。これが私の考えです。

ですが同時に、形式上の民主主義体制とも言われる現在のインドの民主主義体制が社会の底辺に浸透する可能性はあると思えます。たとえばご存知の通り、「パンチャーヤト」制度は非常に重要な自治制度であって、社会の底辺にある種の民主主義的体制と手順を浸透させています。長期的にみて、現在の民主主義的体制と手続きは社会の最深部まで浸透するでしょう。これは私の感想です。

それでインドの民主主義体制が、周辺国に伝播するというようなことがあるのかどうかということですが、これはあるとも言えるし、ないとも言えると思えます。歴史的な経験を申しますと、インドの周辺国に対する姿勢というのは、常にインドの国益を守ることが第一にありました。例えば周辺国が民主主義国になって、それがインドの国益に貢献す

るということであれば、それをインドが支援するということはありましたが、積極的に民主主義化を支援するというようなことは、あまりなかったと思います。しかし全くなかったわけではなくて、1990年代のネパールに対する例もあります。にもかかわらず、やはり大国の行動基準として、国益を第一番にしてきたということが言えるのではないかと思います。

それから比較の基準を示せということですが、私が先ほど言わせてもらったのは、自律的な民主主義体制が確立できるかどうかということが、グローバルに見ても非常に重要な基準であるということです。そして、そのような基準はインドの例から出せるんじゃないかということ、一応申し上げたつもりです。ただし、西洋型のデモクラシーとは別のインド型デモクラシーがあり得るとか、いろいろな議論はありますが、やはりそういう議論は今のところ、絵所先生がおっしゃったようにあまり成功してないと思います。

ということで、ガンジーの思想とか、インドにはいろいろと独自のものがあって、ある程度の貢献度を持つと言われますが、今のところはそういう形で学問的に貢献したというのはあまりないのではないのでしょうか。

(天児) お互いに疲れたと思います。僕は朝、別のところの学会でコメンテーターをして、学会というか研究大会のはしごというのは初めてですが、相当頭がもう、ぼうとしている状況です。だからちゃんとしたお答えができるかどうか分かりませんが、まず一つ最初に申し上げたいのは、インド、中国、ロシアは地域大国としてどう見たらいいのかというふうに問題が提起されていますね。そのことが比較研究とは必ずしも簡単にリンクするものではないと私は思うのですね。

地域大国としての特徴を、中国についてはこういうふうに見ます、ロシアについてはこう見ます。その共通の基準みたいなものがこうあって、その点については中国とロシアとインドでこういう比較をすると意味がありますねという議論、つまり地域大国をどうとらえるかということの結果として比較の意味があるということならば私は理解できます。しかし話を伺っていると、まず比較すべきであると、あるいは比較できるのかという、そこから話が来ているような気がして、少し違うのではないかなと、今さっきから違和感を覚えていました。

本当は、僕は家田さんの議論をサポートしたいのです。非常にコンサバティブな攻撃がたくさん出てきましたが、家田さんは中身をおっしゃっていないから相当攻撃されているのであって、中身を少しでも言えば反論できるだろうと思います。

私が今回どういう基準で中国の地域大国を分析しようとしたのかというと、私は関係性と影響力と秩序形成の三つから見ようとしています。これは必ずしもディシプリンを無視しているわけではないのですが、ディシプリンをより詳細に基準として考えるときに、こ

ういう設定ができないかという一つの試みですね。それを僕は大いにやっただらいいと思います。

それから、岩田先生の核兵器の話ですね、核兵器は地域大国にとって必要条件かという話がありました。今、近藤さんは必要だと言いましたが、私は必ずしも必要ではないと思います。今までは必要だったのです。ところが、例えば今北朝鮮が核を持っていますね。これ、地域大国ですか？あるいはイスラエルが核を持っています。地域大国ですか？という問いをしたときに、必ずしもわれわれは同意しないと思うのですね。つまり核兵器を持つか持たないかというのも、やはりそれは歴史的なバックグラウンドとか、あるいはほかの兵器能力の向上とかそういうものの相関性の中で見ていかなければいけないですね。

それから、要するに大国として何が大事かという、大国は最初に私が申し上げたように、自らの意志、あるいは自らの影響力というものを相手に与えることができるということです。それが核を持つことによって可能な場合は、それは大事なものでしょう。でも、核を持ってもただの防衛のために、自らの国家の存続のために持っているということであれば、これは多分、地域大国の必須条件にならないと思います。

それから、面白い指摘がされました。アングロサクソンに70年すると勝てないという議論があったと思いますが、それについては、中国は今非常にチャレンジしていると私は思います。歴史に、世界史にチャレンジしているととらえられると思います。例えば今年の北京オリンピックの開幕式の、あのすさまじいセレモニーを見ると、まさに世界の歴史は自分たちがつくったという議論をしているわけですね。

それから最近の中国は、やたらと中国自身の言葉でいろいろな説明をしようとしています。例えば「小康社会」をつくるだとか、あるいは最近、「和諧社会」、つまり harmonious society をつくるということを言っています。私自身は今日のこの秩序形成の問題で「中華秩序」という言葉を使いましたが、つい最近、民族問題で著名な王柯先生を早稲田に招いて、お話を聞く機会があったんです。王柯さんの議論で非常に面白かったのは、中国が目指すのは「民族国家」ではなくて「天下国家」だと言っているのですね。

これは、非常に論争的な意見です。中国だってネーションステートでやっているじゃないですか。自分の領土も激しく守るとか、神聖不可侵の固有の領土であるとかいう議論をやるわけで。しかしそれと同時に思考の中では、いわば併存したものとして、「天下国家」という議論も間違いなくあるのですね。ですから私は、やはり中国はグローバルパワーとして目指すものをはっきり持っていると思います。それが成功するかしないかは分からない。私はたぶん、中国は歴史的な古い考え方で言うグローバルパワーになろうとするのであれば、失敗をします。

その失敗する最大の原因というのは、中兼先生が出された問題にも少し関連しますが、やはり分裂と統一という問題からやはり中国は逃れられないのですね。集権的に統一し、

インテグレートしながら、同時に分裂する、拡散するということが、今の中国全体を見ていて明らかにそういうふうにとらえられるわけです。それはもう環境問題の話だとか、さまざまな現象の中で、中国はまさに力でもって上から押さえ付けているけど、押さえ切れないで噴出していくものがあるわけですね。ですからそういう意味で、中国は本当にグローバル化を目指していますが、まだまだ非常に流動的で、不安定な国として見るべきだろうと思います。

(高原) 今天児先生がおっしゃった問題ですが、解体過程にあるかどうかというのははっきりと私には分からないのですが、天児先生も中兼先生もおっしゃったように、いつでもその両方のベクトルが働いているわけですね。とくに成長を促す政策が採られるときには分権的な傾向が強まるというのが、中華人民共和国ができてからの大きな特徴として指摘できると思います。例えば毛沢東の時代にしても、実は毛沢東は中央集権主義者でも何でもなくて、成長のためには中国の場合は分権化すべきだということを言っていました。ただ、その当時は毛沢東の権威、あるいは共産党の権威が非常に高かったので、分裂する恐れはないと踏んでいたわけですね。

成長のためにはやはり分権化を一定程度認めざるを得ないという政策的な立場だと思うのですが、今日ではかつての毛沢東のような権威を指導者が持っているわけではありませんで、ここで出てくるのはやはりナショナリズムです。ナショナリズムの今後の行方というのがいろいろな意味で注目される、今の問題とも関連していることだと思います。

そこで中兼先生はアイデンティティーということをおっしゃったのですが、中国が発展すれば中華アイデンティティーが高まるのかどうか、この辺も微妙だと思います。例えば台湾の場合を取り上げてみますと、台湾において最近の調査結果を見ると、逆に台湾アイデンティティーも高まっているというような結果も出ているんですね。ですからちょっと私には答えがありません。まだ推移を見守っていかないと分からないということです。

それから、中国の経験がほかに伝播しているのか。ベトナムは典型的な例だと思うのですが、やっぱりそれぞれの国の事情がありますので、北朝鮮、ミャンマーについては必ずしもそうっていないと思います。

比較の基準は、私の場合今考えているのは、どちらかといえばスタンダードな、いわゆる比較政治のものですね。政治体制とか、あるいは政治課題であるとか、そういった枠組みを実は考えているのですが、しかしそういった枠組みをはめてみたときに、これまでの教科書に載っているような概念ではとらえきれない事象というのも多々あるわけであって、それをどう捕まえるのかということに、非常に強い関心をもっております。

それで最後に、核は大国の条件かということ。私も必要条件ではないと思います。国際政治で大国とは何ぞやというのがあって、天児先生がおっしゃった通りですが、別に核兵

器がなくとも国際的なインパクトを及ぼし得るわけで、核兵器を持つことは一つの要素にはなりますが、それが必要条件かという、そうではないと私は思います。

(松里) それでは最後に私がしゃべります。これはやっぱり地域研究者のアイデンティティの問題です。今日の発言でも申し上げましたように、私が一貫して考えていることは、やはり地域研究者は、どちらかというとその一国的な知識に頼り過ぎる傾向があるので、もう少しディシプリンの方に足場を置いた方がいいだろうなということです。これは私の立場ですから、賛成する方も反対する方もおられるでしょう。

明日、私は、宗教研究と農村研究という二つのセッションに責任を負っていますが、この二つのテーマは非常に単純な原理から選ばれています。この二つは、ディシプリンの知識の重要性が非常に強く出るトピックなのです。一国的な知識が大事な研究テーマと、ディシプリンの知識が大事な研究テーマとがありますよね。例えば政党制の研究は、案外、一国的な知識が大事なので、比較は非常に難しいと思います。毛里先生が引用なさいましたサルトーリが提唱したのはあくまで政党制の類型論で、政党制の国際比較はすごく難しいと思います。これは、中国研究者も、中国共産党の一党独裁が廃止されて政党制の国際比較をしなければならない立場におかれたときに必ず直面する問題です。

私は、地域大国間の比較は、どちらかというディシプリンの知識が強く求められる、したがって比較が容易なテーマから始めて、国際比較が難しいテーマへとじわじわ拡大していけたらいいんじゃないかなと思っています。

比較自体について言いますと、問題は「比較をするかしないか」ではありません。地域研究者の中で本当に一つの国しか研究していないという方はいらっしゃらないと思います。比較はどこでもやっていて、例えば中国とマレーシアの比較であったり、あるいはロシアとウクライナの比較であったり、インドとパキスタンの比較であったりするわけですね。今の学会の構造がそうなっているから、あるいは楽だから近隣国と比較するわけですが、「どうせ今でも比較はしているんだから、困難も大きいけど、そのぶん得るところも大きいような比較をしてみようよ」というところから、この新学術領域研究は生まれたと思います。楽な比較をしても、その意義は小さいと思います。

(毛里) どうもありがとうございました。結構うまい具合に議論ができたと思いますが、最後に一つ、二つお話して、それで終わりたいと思います。私は現代中国を研究していますが、基本的に現代中国研究者は、もっと徹底的に他と比較をすべきだというのが私の考えです。要するに、中国という土俵だけで考えるやり方を変えていかないといけないと思います。現在の中国は非常に普通化していて、「ブルータス、お前もか」という感じで、基本的には皆同じことをやっているわけです。だからそういうところから言うと、やはり

もう少し徹底した比較を行って、思考の実験をしてみた方がいいと思います。

先ほど抽象化と固有化、つまり固有の特徴を導き出す、この二つのベクトルがあるというお話をしましたが、直接的な比較の効用というのは、問題があまりに多いので、やはり切り口を限定するということですね。中国はこっちに行ったりあっちに行ったり、分権だ、集権だ、何とかだかんとかだと、あらゆることが言えます。社会科学というのは、問題を限定していくことで一つの勝負ができるものなので、そのためには比較のスケールでもって限定していく作業が、非常に大事になると思います。迷子にならないようにするのはどうしたらよいか、ということですね。学問的な迷路に入らないにはどうしたらよいか。ぜひこれからの若い中国研究者の注意を喚起したいと思います。

五年間、21世紀 COE「現代アジア学の創生」をやり、とても成功したとは言いがたいのですが、私には非常に勉強になりました。中国から意識的に離れて、松里さんがおっしゃったような、インドネシアの政党制と中国、日本の政党制はどう違って、どう同じなのか、というようなことを考えました。私は、今のところ、政治体制とか政治文化という領域では、基本的に「東アジアは一つ」というのが結論として出せると思っています。経済システムで「東アジアは一つ」が言えるかどうか分かりませんが、やはり一度そういう極端な問題の立て方を試みてみることはとても大事なことだと思います。

今日はロシアとインドと中国という、お互いに分からない人同士、個性の強い研究者同士が集まって、最後までけんかにならずに、平和的に実りのある対話がちゃんとできたと総括できると思います。そういうふうに思ってくださいれば大変に幸いです。

スラブ研究センターの研究者の「学問的仕掛け」に応えてこれからのいい成果が出てくることを期待します。本日はパネラーの皆さん、報告をして下さった皆さん、そして会場に残って議論に加わって下さった皆さんに、お礼を申し上げたいと思います。大変ありがとうございました。本日は終わります。(拍手)

(会議終了)